

館林市史編さん事業の成果と継承 ～報告と提言～



令和8年1月28日

館林市史編さん委員会

目次

はじめに	1
<報 告>	
1 事業の経過	1
(1) 委員会活動	1
(2) 調査活動	2
(3) 刊行事業	3
(4) 古文書等の資料整理	5
(5) 普及活動	6
(6) 日本遺産「里沼」との連携	9
(7) 「館林市歴史文化基本構想」「館林市文化財保存活用地域計画」との関わり	10
2 事業の成果	10
(1) 市民の反響と新資料の発見	10
(2) 資料館の企画展示等との連携	11
(3) 学校教育との連携	13
(4) 専門の学界からの注目	14
(5) 他自治体の手本	14
<提 言>	
事業終了後の課題	15
1 古文書等の整理・調査・保存活用	15
2 普及活動	15
3 情報の発信	16
4 刊行事業	16
5 組織と人材	16
おわりに	17

はじめに

館林市史編さん事業は、平成 13 年（2001）度から事業を開始しました。本事業は所期の目的を達成し、令和 7 年（2025）度をもって事業完結します。

以下、これまでの市史編さん委員会等において審議された、市史編さん事業の歩みを報告し、長期にわたる活動の成果を報告し、その継承と活用について提言いたします。

<報告>

1 事業の経過

基本計画では通史編・資料編・特別編全 16 巻の刊行を予定していました。調査研究の進展に伴う大量の新出資料の発見及び市の周年記念事業などに伴う別巻の追加を行ったことから、通史編・資料編・特別編 16 巻と別巻 8 巻の合計 24 巻の刊行となりました。

（1）委員会活動

市では、平成 13 年（2001）7 月に市長・副市長・教育長・市議会議長・市内学校代表・区長代表・商工会議所代表・監修者・学識経験者等 20 名で構成される館林市史編さん委員会を設置し、同年に館林市史編さん事業基本計画を策定しました。

平成 13 年 11 月に、監修者峰岸純夫氏を専門委員長として、市史刊行に向けた調査研究と執筆を担当する、各時代・分野の専門委員の代表である 7 名の委員長・部会長による館林市史編さん専門委員会を設置しました。さらに平成 13 年 12 月に、専門委員会の附属機関として館林市史編さん調査協力員会を設置し、学識経験者及び関係団体の代表等からなる 15 名の調査協力員がおかれしました。編さん委員会、専門委員会、調査協力員会ではいずれも、今日まで編さん事業の内容についての議論を重ね、令和 8 年（2026）1 月までに、編さん委員会は 50 回、専門委員会は 98 回、調査協力員会は 41 回の会議を開催してきました。

市史編さん事業を担当する事務局は、平成 12 年度に秘書室広聴広報係から準備が始まり、平成 14 年度に同室市史編さんセンターとして独立しました。平成 16 年度には機構改革により政策企画部企画課に移り、平成 21 年度には再度の機構改革によって教育委員会文化振興課内に移って現在に至っています。

○編さん委員会の活動

平成 13 年度から令和 7 年度に開催されました。主な議題は市史刊行計画、市史編さん事業の進捗状況と市史刊行物の発行予定、市史刊行物の内容、各年度事業の予定、市史の今後の体制・活用等についてです。

○専門委員会の活動

当初には、原始古代・中世・近世・近現代・自然・民俗の 6 部会を設置し、平成 29 年度に文化部会を追加しました。部会長を含む専門委員が中心となって各巻の刊行計画を

管理し、さらに部会ごとに調査員を委嘱して、市史刊行に向けての資料収集と調査研究に合わせて執筆作業を進めました（「(2) 調査活動」参照）。別巻を含む全巻の刊行が令和8年で完了の見込みです。

○調査協力員会の活動

地元の研究者や郷土史団体による協力機関であり、資料情報提供、資料調査協力、刊行物の構成と内容の検討、古文書解読や校正などを行いました。

○事務局

館林市第二資料館管理棟を市史編さんセンター事務局として活動しました。所長（係長職→課長兼務）1名、正職員（学芸員含む）1～3名、会計年度任用職員2～6名が配属されました。

（2）調査活動

調査活動は市史の刊行のための調査だけではなく、文化財行政として継続的に行うべき未指定文化財調査や刊行後の追跡調査なども含んでおり、いずれの部会においても担当巻刊行後も引き続き取り組んでいます（表1参照）。

表1 各部会活動内容

部 会 名	部 会 長	専門委員・ 調査員等数	部会開催 回数	内 容
原始古代部会	前澤和之	7	64	原始古代に関する調査研究（発掘調査された遺跡や遺物、古代史料・文献の検索と調査、長柄神社・長良神社の現地調査など）
中世部会	築瀬大輔	7	61	中世に関する調査研究（中世古文書〈善導寺文書、茂林寺文書、龍興寺文書、愛宕神社文書、長良神社文書ほか〉、板碑など）
近世部会	佐藤孝之	6	147	近世に関する調査研究（近世古文書〈武家資料、町方史料、村方史料ほか〉、絵図〈封内経界図誌、水害絵図ほか〉など）
近現代部会	青木哲夫	10	74	近現代に関する調査研究（近代文書〈国立公文書館所蔵足尾鉍毒事件関係文書、福田啓作日誌、田山家文書、軍事郵便ほか〉、公文書〈旧町村行政文書、館林市行政文書、広報な

				ど)、現代資料(新聞、雑誌ほか)など)
自然部会	澤口 宏	14	16	地質・動植物に関する調査研究(館林の大地や河川・沼の形成史、水環境、魚類、植物、鳥類、昆虫、両生類、哺乳類など)
民俗部会	板橋春夫	7	38	民俗に関する調査研究(生業、衣食住、社会生活、人の一生、年中行事、信仰、祭礼、伝説など)
文化部会	前澤和之	3	12	文化・芸術に関する調査研究(建造物と街並み、絵画、刀剣、彫刻、仏像、工芸、文学、文化財、由縁の人物など)

※委員・調査員の氏名は令和8年度刊行予定の『館林市史完結記念誌』に掲載します。

(3) 刊行事業

24巻(本編16巻と別巻8巻)と、9冊の調査報告書等を刊行しました(表2参照)。

各時代・分野の通史を資料編に基づき時代を追って叙述した「通史編」、原始古代・中世・近世・近現代の主な歴史資料の翻刻掲載や考古遺跡情報を掲載した「資料編」、館林の歴史文化を象徴する、特記すべき情報を分野ごとにまとめた「特別編」が本編です。

「別巻」は、通史編・資料編・特別編刊行後に発見された、寺社に関する文化財をまとめたものや、市制施行記念誌(50周年・60周年・70周年)・日本遺産認定記念誌、普及版・教材版などを作成し、さらに、館林市史や館林市域に係る研究論文等を掲載した「市史研究」、民俗調査や建造物調査等のうち、特記すべき情報をまとめた「調査報告書」も作成しました。

刊行物の頒布価格については、編さん委員会での検討に基づいて市民が入手しやすいものとなりました。

各刊行物については、学校・図書館・博物館などの関係施設、市外の関係機関などに配布しました。また、館林市立資料館・館林市文化会館・館林市立図書館・田山花袋記念文学館・向井千秋記念子ども科学館・市内公民館・群馬県立館林美術館ミュージアムショップや市内書店(1か所)において頒布しています。

各刊行物はいずれも館林市域の自然・歴史・文化についての最新の情報を含んだ学術的にも価値が高い内容であることから、広範な需要があり複数の巻が在庫なしの状態になっています。

表2 市史刊行物一覧表

種 別	書 名	刊行年度	頒価等
通史編	通史編1 『館林の原始古代・中世』	平成26年度	3,000円
	通史編2 『近世館林の歴史』	平成27年度	3,000円
	通史編3 『館林の近代・現代』	平成28年度	3,000円
資料編	資料編1 原始古代『館林の遺跡と古代史』	平成22年度	3,000円
	資料編2 中世『佐貫荘と戦国の館林』	平成18年度	3,000円/ 在庫なし
	資料編3 近世Ⅰ『館林の大名と藩政』	平成24年度	3,000円/ 在庫なし
	資料編4 近世Ⅱ『館林の城下町と村』	平成20年度	3,000円
	資料編5 近現代Ⅰ『近代館林の歩みと社会』	平成25年度	3,000円
	資料編6 近現代Ⅱ『鉾毒事件と戦争の記録』	平成21年度	3,000円
特別編	特別編第1巻『館林とツツジ』（市制施行50周年記念）	平成16年度	3,000円/ 在庫なし
	特別編第2巻『絵図と地図にみる館林』	平成17年度	3,000円/ 在庫なし
	特別編第2巻『絵図と地図にみる館林』（DVD版）	令和元年度	1,500円
	特別編第3巻『館林の自然と生きもの』	平成19年度	3,000円
	特別編第4巻『館林城と中近世の遺跡』	平成21年度	3,000円
	特別編第5巻『館林の民俗世界』	平成23年度	3,000円
	特別編第6巻『館林の町並みと建造物』	平成29年度	3,000円
	特別編第7巻『館林の文化と芸術』	令和3年度	3,000円
別巻	別巻1『写真で見る館林』（市制施行60周年記念）	平成25年度	1,500円
	別巻2①普及版『館林の歴史』	平成30年度	1,500円
	別巻2②教材版『ぽんちゃんと学ぼう館林の歴史』	平成30年度 ※令和3年度・7年度改訂（以後3年ごとに改訂予定）	1,000円
	別巻3『館林の寺社と史料』	令和2年度	2,000円
	別巻4『館林の里沼』（日本遺産認定記念）	令和3年度	2,000円

	別巻5『館林の絵馬』（寺社の文化財Ⅰ）	令和4年度	2,000円
	別巻6『館林の寺社建築』（寺社の文化財Ⅱ）	令和7年度	2,000円
	別巻7『館林の仏像と寺社絵画』（寺社の文化財Ⅲ）	令和7年度予定	2,000円
	別巻8『館林歴史人物事典』（市制施行70周年記念）	令和6年度	2,000円
市史研究	おはらき創刊号	平成16年度	500円
	おはらき第2号	平成17年度	500円
	おはらき第3号	平成20年度	500円
	おはらき第4号	平成23年度	500円
調査報告書	民俗1『水と暮らし—館林市上三林・下三林地区を中心に—』	平成17年度	1,000円/ 在庫なし
	民俗2『城下町館林の暮らしと民俗』	平成19年度	1,000円/ 在庫なし
	民俗3『風土と暮らし—館林市上早川田の民俗—』	平成22年度	1,000円
	日清製粉（株）館林工場内の歴史的建造物	平成17年度	1,500円
	館林の武家屋敷 旧館林藩士住宅の復元と整備	平成21年度	1,000円/ 在庫なし

（４）古文書等の資料整理

市史編さん事業の過程で収集・調査した古文書等をはじめとする歴史資料は285件（約44,000点）となります。資料整理にともなって古文書は専用の保存封筒に入れるとともに、写真撮影によるデジタル化を行い、公開のための準備をし、資料の保存と活用を進めています（表3参照）。

表3 市史による資料整理状況

	内 容	目録件数	資料点数	備 考
1	群馬県史調査資料の再調査	31	4,028	
2	個人所蔵資料	119	24,539	未整理あり
3	団体・寺社・公共機関等資料	35	15,340	未整理あり
	合計	185	43,907	

※写真、考古、民俗、美術資料なども含む

(5) 普及活動

市史の内容を反映したパンフレットを作成し、関係施設等で無償配布しています(表4参照)。また、市史をテーマにした講演会等(表5参照)や公民館での出前講座などで、市民に市史の成果を伝えています。歴史講演会や日本遺産関係のシンポジウムなどでは市史のPRブースも設けています。

「広報たてばやし」では市史に関する新発見などを紹介する「市史コラム」を20年以上にわたって約250回を連載しています。さらに、歴史的建造物や道標、碑を紹介するコラムも連載し、市民の歴史や文化への関心を高めています(表6参照)。

市立資料館においては、収集した資料や調査研究の成果を活かした企画展を開催しています。新発見の資料の公開や調査研究の成果を通して、市史編さんセンターとの相互連携による活動内容の充実を図っています。

学校教育においては、教材版『ぼんちゃんと学ぼう 館林の歴史』を市内小学校6年生の社会科副教材として毎年配付しています。さらに高校生が登壇するシンポジウムの開催などを通して連携を図っています。

表4 市史発行パンフレット

発行年度	発 行 物
平成30年度	《日光脇往還を歩く》
令和3年度	チャレンジ! 館林歴史クイズ
令和4年度	榊原康政公ゆかり館林まちあるきマップ
令和5年度	最後の館林藩主秋元家ゆかり館林まちあるきマップ

表5 市史関係講演会一覧

市 主 催 事 業			
日時	講師・登壇者	内容	会場
平成19年10月 13日(土)	峰岸純夫(監修者・専門委員長)	館林歴史講演会「中世館林城～その四度にわたる落城の歴史～」	館林市文化会館 小ホール
平成19年10月 20日(土)	築瀬大輔(中世部会専門委員)	館林歴史講演会「謙信・氏康の大利根戦国絵巻～戦国武将は利根川をどう越えたか～」	館林市文化会館 小ホール
平成20年11月 1日(土)	澤口 宏(自然部会専門委員)	館林歴史講演会「館林、大地の生い立ち～渡良瀬川と利根川の変遷～」	館林市文化会館 小ホール

平成 20 年 11 月 8 日（土）	前澤和之（原始古代部会 専門委員）	館林歴史講演会「古代邑楽 の水辺の暮らし～沼への 畏れ、川との闘い～」	館林市文化会 館 小ホール
平成 21 年 10 月 31 日（日）	佐藤孝之（近世部会専門 委員）	館林歴史講演会「古文書に みる江戸時代の館林」	館林市文化会 館 小ホール
平成 21 年 11 月 23 日（火・祝）	深井雅海（聖心女子大学 教授）	館林歴史講演会「館林城主 徳川綱吉一将軍就任と家 臣の活躍一」	館林市文化会 館 小ホール
平成 23 年 1 月 23 日（日）	青木哲夫（近現代部会専 門委員）	館林歴史講演会「戦争とく らし」	館林市文化会 館 小ホール
平成 23 年 11 月 13 日（日）	車崎正彦（原始古代部会 専門委員）	館林歴史講演会「ヤマト王 権と東国の古墳」	館林市文化会 館 小ホール
平成 23 年 11 月 23 日（水・祝）	前澤和之（原始古代部会 専門委員）	館林歴史講演会「古代資料 が語る毛野と邑楽・館林」	館林市文化会 館 小ホール
平成 24 年 10 月 20 日（土）	板橋春夫（民俗部会専門 委員）	館林歴史講演会「長寿と現 代社会」	館林市文化会 館 小ホール
平成 24 年 11 月 23 日（金・祝）	永島政彦（民俗部会調査 員）	館林歴史講演会「生業から 見た暮らしの変化」	館林市文化会 館 小ホール
平成 25 年 11 月 4 日（月）	佐藤孝之（近世部会専門 委員）	館林歴史講演会「殿様は “転勤族”」	館林市文化会 館 小ホール
平成 26 年 11 月 8 日（土）	徳川家広（公財徳川記念 財団理事）、佐藤孝之（近 世部会専門委員）	館林市制施行 60 周年記念・ 館林市立資料館特別展「徳 川綱吉一館林城主から将 軍へー」記念講演会「徳川 綱吉とその時代」	館林市三の丸 芸術ホール
平成 27 年 2 月 7 日（土）	高柳友彦（近現代部会調 査員）	館林歴史講演会「近代館林 の鉄道と産業」	館林市文化会 館 小ホール
平成 28 年 1 月 30 日（土）	築瀬大輔（中世部会専門 委員）	館林歴史講演会「上杉謙信 の館林城攻め」	館林市文化会 館 小ホール
平成 28 年 2 月 11 日（木・祝）	前澤和之（原始古代部会 専門委員）	館林歴史講演会「上野三碑 と田山花袋の古代史」	館林市文化会 館 小ホール
平成 29 年 3 月 5 日（日）	佐藤孝之（近世部会専門 委員）	館林歴史講演会「館林藩に みる武士の勤めと暮らし」	館林市文化会 館 小ホール
平成 29 年 12 月 3 日（日）	木下路子（近現代部会調 査員）	館林歴史講演会「明治・大 正期館林の教育の広がり	館林市文化会 館 小ホール

		一小学校・夜学校・実業補習学校を中心にー」	
平成 30 年 12 月 2 日（日）	徳川家広（（公財）徳川記念財団理事）、佐藤孝之（近世部会専門委員）、渡邊宰希（劇団グスタフ）、須藤和臣（館林市長）	徳川綱吉公シンポジウム ①演劇「勇気の人・徳川綱吉公」/②基調講演/③パネルディスカッション「徳川綱吉公から引き継ぐまちづくり」	館林市三の丸 芸術ホール
平成 31 年 3 月 16 日（土）	滋賀秀實（文化部会専門委員）	館林歴史見学会「市内の歴史的建造物について学ぼう」	市民センター /毛塚記念館/ 梅の湯
令和 6 年 12 月 7 日（土）	館林高校生 3 名/館林女子高校生 4 名/関東学園大学附属高校生 2 名/前澤和之（原始古代部会専門委員）/須藤 聡（中世部会調査員）/佐藤孝之（近世部会専門委員）/青木哲夫（近現代部会専門委員）	市史発刊 20 周年記念シンポジウム「未来へつなぐ館林市史～伝えていきたい「推し」の人物～」 ①高校生発表「伝えていきたい「推し」の人物」/ ②報告「それぞれの時代の歴史人物」/③トークセッション「高校生の質問ー館林の歴史の謎ー」	館林市文化会館 小ホール
市共催事業			
日時	講師・登壇者	内容	会場
令和 5 年 10 月 21 日（土）～23 日（月）	前澤和之（原始古代部会専門委員）/佐藤孝之（近世部会専門委員）/飯森康広（中世部会専門委員）/坂本達彦（近世部会調査員）/中嶋久人（近現代部会専門委員）/高柳友彦（近現代部会調査員）/永島政彦（民俗部会調査員）	地方史研究協議会 第 73 回（館林）大会 ①基調講演/②共通論題報告/③自由論題報告/④市内巡見	館林市文化会館 小ホール /市内里沼

※講師・登壇者の氏名・所属・役職は当時のもの

表 6 市史関係広報たてばやし連載記事

掲載年月	記事名	内容
平成 15 年 4 月～（連載中、令和 8 年 1 月時点で 244 回）	市史コラム	市史に関する新発見などを紹介する
平成 17 年 4 月～平成 22 年 4 月（全 61 回）	街・たてもの	市内の歴史的建造物を紹介する
平成 22 年 5 月～平成 25 年 3 月（全 35 回）	たてものの物語	市内の歴史的建造物を紹介する
平成 25 年 4 月～平成 28 年 4 月（全 36 回）	道標～みちしるべ～	市内の道標を紹介する
平成 28 年 5 月～（連載中、令和 8 年 1 月時点で 117 回）	碑～いしぶみ～	市内の碑を紹介する

（6）日本遺産「里沼」との連携

館林市における日本遺産認定を目指すため、市史編さんセンターに、平成 30 年度からプロジェクトチーム（日本遺産 PJ）が設けられ、関係業務を担当する職員 2 名が配置されました。日本遺産制度は、地域の歴史的魅力や文化を語るストーリーを文化庁が認定するものであり、それらを活用できる体制を組むのに適切と判断されたためです。同 PJ の活動などによって、令和元年度に「里沼(SATO-NUMA)～「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化～」が日本遺産に認定されました。同時に、文化庁からは「里沼」の学術的な意義の掘り下げが指示され、令和 2 年度に文化振興課内に日本遺産推進係が新設され、関係業務はそちらに移されました。

こうした経緯を踏まえ、市史編さんセンターは日本遺産「里沼」にかかわる諸事業と綿密な連携を継続しています。とりわけ「里沼」の裏付けとなる学術的な部分の多くはこれまでの市史による調査研究と、その成果の反映である『館林市史』が担っています。その一つとして、令和 3 年度に『日本遺産認定記念 館林市史別巻 館林の里沼』を刊行し、これまでの成果を整理して深めるとともに、多々良沼の鉄滓化学分析をはじめ多くの新たな調査を進め、「里沼」の学術的意義を高めるための研究とその成果の公開に努めています。

「里沼」の活動が注目され、令和 5 年度には全国的な学術団体である地方史研究協議会の大会が、「里沼」をテーマの一つにして館林市で開催されました（館林市および館林市教育委員会が後援、市史編さんセンターが開催地事務局を担当）。この大会の開催とその成果をまとめた論集『“川合”と「里沼」～利根川・渡良瀬川合流域の歴史像～』（地方史研究協議会編、雄山閣、2024 年）の刊行によって、「里沼」を対象とした館林市の取り組みと研究の成果が全国に知られるところとなり、「里沼」の認知度は学術の分野においても高まっています。

（７）「館林市歴史文化基本構想」「館林市文化財保存活用地域計画」との関わり

館林市の文化行政の基本指針として策定された「館林市歴史文化基本構想」と「館林市文化財保存活用地域計画」においても、市史編さんの成果が大きな役割を果たしました。

平成 30 年度に策定された「館林市歴史文化基本構想」は、館林市域に存在する文化財を文化財保護法や条例に基づく指定や登録の有無に関わらず広く把握し、その総合的な保存・活用・継承を図ることを目的としたものです。そこにおいても未指定の文化財の把握において市史の調査成果が活かされ、構想の土台を固めるのに役立ちました。この構想は沼辺・河川の利用と暮らしをはじめ、館林市域の特色を改めてまとめ直したことで、日本遺産「里沼」のストーリーを構成する多数の文化財の位置づけを明確にするものとなりました。

令和 6 年度には、改正された文化財保護法に基づく施策である「館林市文化財保存活用地域計画」が文化庁に認定されました。これは日本遺産の認定後、改めて「里沼文化」の保存・活用も含めて館林市の文化財行政の基本方針と指標を具体的に定めたものです。この計画において、市史編さん事業の継承と活用が明記され、「里沼学（仮称）」の研究推進と支援など、後継体制が行うべき業務の基本が明確化されました。

２ 事業の成果

今回の市史編さん事業では、多くの成果を挙げることができました。刊行物の発行だけでなく、幅広い調査を行ったことで、膨大な古文書等が発見・収集されました。そして、その成果の活用を並行して積極的に進めたことにより、市民をはじめ行政機関・教育現場・学界・他の自治体等へ市史編さんの成果を幅広く知ってもらうことができました。日本遺産「里沼」や「館林市歴史文化基本構想」「館林市文化財保存活用地域計画」は文化施策としての代表的な成果ですが、それ以外の主な事例には以下のことがあります。

（１）市民の反響と新資料の発見

市史を刊行する毎に、市民をはじめとする多くの方がたから、内容についての質問や感想をいただきました。質問は掲載内容の意味を問う専門的なものから、掲載された資料を実際に見る方法を知りたいといったことまで、幅広いものがありました。在庫なしとなった巻もあり、広い意味で館林市の歴史文化を発信できたといえます。

刊行物の体裁については、写真を豊富に使ったオールカラーの誌面と、箱入りにせず手に取りやすい表紙などの工夫により、市民の方がたの興味関心を高めるとともに、内容を理解しやすくなることができました。

事業をはじめめるにあたり、市の広報紙やホームページ上で身近に残る歴史資料の情報をお寄せいただきたいという旨を、市民に向けて広報しました。それにより市内外の多くの方から情報の提供いただき、「寺田家資料」（近世～近代）をはじめとする個人蔵の新資料を多く発見し、市史の内容に取り入れることができました。

また、富士嶽神社の初山まつり関係資料は、市史の調査の後で本市初の市指定重要有形民

俗文化財となり、常光寺の阿弥陀如来坐像のように、市史による調査がきっかけで群馬県指定重要文化財になる事例もありました。そして、中央通り線拡幅の時期とも重なったため、可能な限りの記録保存を行い、解体される建物の図面を多く作成するとともに幅広い歴史資料を救出しました。そうした新たに見つかった資料は膨大であり、その整理と活用が事業終了後の課題となっています。

（２）資料館の企画展示等との連携

市史調査の進行に応じて、その成果は館林市第一資料館の展示にも反映されてきました。それは表 7 の通りです。市史の歩みと資料館展示とは密接に連携して、市史により見出された新たな成果が随時反映されてきました。

館林市特別編第 2 巻『絵図と地図にみる館林』刊行にあわせた平成 18 年度企画展「絵図・地図に見る館林」、館林市通史編 1『館林の原始古代・中世』刊行にあわせた平成 27 年度特別展「古墳時代の館林ー『甲を着た古墳人』の時代ー」など、市史の進行に応じて多様なテーマの展示を行ってきました。

特に平成 25 年度地域協働展「サムライたちのメール～義貞から信長まで～」では、中世部会長が企画から関わり、書簡を「メール」と表現し現代的に解釈して市民にわかりやすく市史の成果を伝えることができました。

また、平成 26 年度館林市制施行 60 周年記念・特別展「徳川綱吉ー館林城主から將軍へー」では近世部会の協力を得て、近年再評価が進む徳川綱吉が館林城主であったことを大きく宣伝する機会となり、注目を集めました。

日本遺産「里沼」との関わりも密接であり、平成 30 年度企画展「SATO-NUMAー里沼物語ー」第 1 部「守りの沼ー城沼ー」～令和元年度企画展「SATO-NUMAー里沼物語ー」第 3 部「実りの沼ー多々良沼ー」をはじめ、日本遺産認定前後から「里沼」に関係するテーマの展示を複数回開催しており、市史と日本遺産が一体となって活動してきた成果として好評を得ました。

表 7 市史に関係する第一資料館展示内容

年 度	展 示 テ ー マ	関係分野
平成 16 年度	特別展「市制施行 50 周年ー館林市のあゆみー」	近現代 民俗
	収蔵資料展「秋元家の調度品」	近世
平成 17 年度	収蔵資料展「大名行列を見てみようー館林藩主の記録から」	近世
	小室翠雲と弟子たちー南画の系譜ー	文化

平成 18 年度	企画展「絵図・地図に見る館林」	近世 近現代
	特別展「水辺に生きる―水害と治水―」	近世 近現代 民俗
	特別展「書は人なり―生誕 100 周年記念 川田龍峰展」	文化
平成 19 年度	特別展「光は大空より―藤野天光展」	文化
	収蔵資料展「絵はがきで見るたてばやし」	近現代
平成 20 年度	収蔵資料展「たてばやしの足あと」	近現代
	特別展「艸の中の魚たち―岸浪百草居の世界」	文化
	企画展「郷土の歴史を伝えた人たち」	全分野
平成 21 年度	企画展「上下東西～気になる「毛」～」	全分野
	特別展「まちのかたち ―絵図でみる城下町のように―」	近世 近現代
	企画展「たてばやしのまつりと年中行事」	民俗
平成 22 年度	企画展「かるた―遊びと学びのコラボ―」	全分野
平成 23 年度	特別展「たてばやしの伝説―キツネとタヌキの化かしあい―」	民俗
平成 24 年度	特別展「館林藩を支えた領地―越智松平家と播州三木の歴史―」	近世
	第 4 回関東地区博物館協議会共同企画展「川がもたらしたものの」	全分野
平成 25 年度	田中正造没後 100 年記念・特別展 「足尾鉍毒事件と館林の人びと」	近現代 自然
	地域協働展「サムライたちのメール～義貞から信長まで～」	中世
平成 26 年度	館林市制施行 60 周年記念・特別展 「徳川綱吉―館林城主から将軍へ―」	近世
平成 27 年度	企画展「戦時下の館林―市民が見た戦争の記録―」	近現代

	特別展「古墳時代の館林—『甲を着た古墳人』の時代—」	原始古代
平成 28 年度	特別展「武士の生き方—館林藩士のつとめとくらし—」	近世
平成 29 年度	特別展「館林の学び舎～学校の変遷と子どもたち～」	近現代
平成 30 年度	明治 150 年記念・特別展「激動の時代を生き抜いた人びと～館林の明治維新～」	近世
	企画展「SATO-NUMA—里沼物語—」第 1 部「守りの沼—城沼—」	全分野
令和元年度	企画展「SATO-NUMA—里沼物語—」第 2 部「祈りの沼—茂林寺沼—」	全分野
	企画展「SATO-NUMA—里沼物語—」第 3 部「実りの沼—多々良沼—」	全分野
	特別展「館林の絵馬」	民俗
令和 2 年度	特別展「水と生きる」	民俗
令和 3 年度	日本遺産「里沼」構成文化財追加認定記念企画展「沼辺のたから」	全分野
	藤牧義夫生誕 110 周年記念特別展「藤牧義夫と館林」	文化
令和 4 年度	特別展「徳川ゆかりの道—日光脇往還をゆく」	近世
令和 5 年度	藤野天光生誕 120 周年記念特別展「幸福は愛より始まる」	文化
令和 6 年度	特別展「近世館林藩主 7-17」	近世
	市制施行 70 周年記念企画展「没後 80 年よみがえる石井清夫—戦前の館林に美術の種をまいた画家—」	文化
令和 7 年度	戦後 80 年企画展「館林と戦争」	近現代
	昭和 100 年特別展「館林今昔物語」	近現代

（３）学校教育との連携

市史編さんの成果を将来にわたって継承していくためには、学校教育との連携が重要であると考え、学校への出前講座をはじめ教育現場と連携した活動を行いました。

平成 30 年度に刊行した館林市史教材版『ぽんちゃんと学ぼう館林の歴史』は、市史の成果を市内の学校教育現場において活用してもらうために作成したものです。市内小学校 6 年生全員へ毎年配付する教材となり、令和 7 年度までに増刷を 2 回行い、3 刷となっています。教材版が刊行される前は、学校現場から小学校で館林の歴史を学ぶ機会が少ないこと、教職員がこれまで館林の歴史を学ぶ機会が少ないので授業に反映できないことが課題とし

てありました。しかし教材版の刊行により、小学生がわかりやすく館林市の歴史を学べるようになり、さらに教職員にも館林の歴史を学ぶ入門書として活用されるようになりました。これにより、館林の歴史に関する郷土学習の充実に大きく貢献することができたと言えます。

また、定期的な改訂は調査研究成果の見直しの機会ともなり、最新の成果を教材に反映するとともに、専門的な調査研究を継承していく土台にもなります。今後も館林市史教材版の活用を継続することが、市内の小学生の郷土意識醸成に貢献し、市史の成果の定期的な振り返りにもつながることが期待できます。今後も継続した配付を計画しており、3年に一度の改訂を行う予定となっています。

（４）専門の学界からの注目

市史編さんでの研究の成果は、専門の学界でも注目されました。さまざまな研究論文で内容が引用されるとともに、長年の活動によりその活動そのものへの注目が高まって、全国的な学術誌でも紹介されるようになりました。

1－（６）で示した「地方史研究協議会 第73回（館林）大会」は、そうした評価の一つです。地方史研究協議会は年に1回大会を開催している全国学会で、多くの場合は県庁所在地や政令指定都市など大きな自治体が大会の会場となる中で、館林市で開催されたのは市史編さんの成果が高く評価されたことに他なりません。大会のテーマは「“川合”と「里沼」―利根川・渡良瀬川合流域の歴史像―」となり、まさに市史が共通テーマとしてきた「水辺」と「境界の地域」、その地域性を象徴するものとして「里沼」が取り上げられたわけです。大会の成果は、論集『“川合”と「里沼」―利根川・渡良瀬川合流域の歴史像―』にまとめられ、掲載された多数の論文を通して市史編さんの成果は全国に発信されました。

（５）他自治体の手本

県内や近隣の自治体・図書館を中心に刊行物を寄贈、広く市史編さんの成果を発信し、関心と呼び寄せるようにしてきました。また、初代館林城主榑原康政ゆかりの上越市（新潟県）・豊田市（愛知県）・姫路市（兵庫県）をはじめ、館林藩の飛び地「播州分領」があった三木市（兵庫県）など歴史的に本市とゆかりのある自治体や、名護市（沖縄県）など友好都市協定を結んでいる自治体など遠方の自治体とも図書交換を行い、両者の歴史的なつながりを再認識し、友好関係をさらに発展させる一助となるようにしてきました。

そして、近隣自治体では令和4年度から桐生市史、令和5年度から伊勢崎市史の編さん事業が開始されましたが、事業の開始にあたり館林市史編さんが先行事例として重視されました。業務内容や調査研究体制などの検討に当たっては、館林市史編さんでの基本計画や運営の方法、さらに実務経験が活かされました。また、専門委員会などには館林市史編さんにかかわった専門委員・調査員が中枢を担う立場で参加しており、広く人材育成や研究力の増強に貢献したことを示しています。そこには、事業終了後の動向も含まれており、今後も注目され続けることが予想されます。

＜提言＞

事業終了後の課題

今回の市史編さん事業では、館林市域の地形の成り立ちと自然環境、それに育まれた歴史と文化を体系的にまとめ、市民が手に取りやすい形で提供してきました。すべての巻が刊行されたことで事業はいったん終了します。しかし、収集した資料には目録が整備されていない未整理のものが 있습니다。これら市民共有の財産と言える膨大な資料を整理してデータベースとし、地域情報として発信していく取り組みが必要です。その実現に向けての提言をいたします。

1 古文書等の整理・調査・保存活用

市史編さん事業の過程で収集した膨大な古文書等の整理及び目録を作成し、保存・活用を進めます。近年は所有者の高齢化や世代交代、家屋の解体などで資料調査の件数が増加し、これまで長きにわたって取り組まれてきた教育史編さん収集資料や旧町村資料、当市の歴史公文書や広報写真などの未整理資料も蓄積・増加していることから、今後も継続した目録作成が必要となります。

現在、これらの収集資料は市史編さんセンターが管理し、第二資料館などで保管していますが、今後、適切な収蔵施設を確保しての資料整理体制の継続が喫緊の課題となります。さらに、近年頻発する地震・洪水などの災害に備え、個人や寺社・団体に所有している古文書や生活用具などの所在確認を継続的に進めていく必要があります。

また、市史編さんでは市内全般にわたって調査を進めてきましたが、各地域に残る文化遺産は急速に失われています。地域に残る歴史・民俗・芸術品、そして多様な自然などを対象にしての地域に密着したきめ細かな調査を行い、それを集成した大字誌などを作成して、地域ごとの生活の歴史と文化を継続的に伝えられるようにする必要があります。そのことが、文化庁から指示された「里沼」の学術的意義の掘り下げとなり、発生の可能性が指摘される災害からの復旧と地域社会の復興に不可欠な資源となります。

2 普及活動

市史編さんでは、成果をテーマにした講演会や公民館での講座などを行ってきました。今後もそれらを継続して市民と共有できるように努める必要があります。それを通して市民が主体となった講座（「館林市史を読む会」など）へと発展させ、市民が自ら学びながら市史編さんの成果を身近に感じたり、見直したりする仕組みが作られることを望みます。

学校教育との連携においては館林市史教材版『ぼんちゃんと学ぼう 館林の歴史』の積極的な活用を図り、小中学校での学びとの連携を強めることで、地域に根付いた生き生きとした学習の支援を求めます。

市立資料館および田山花袋記念文学館、向井千秋記念子ども科学館においては、調査成果

や収集資料を基にした展示活動の企画を提案し、市史編さんでの成果を継続して公開・活用することが望まれます。

3 情報の発信

収集した膨大な古文書・記録・写真などの中には、館林藩関係資料や鉾毒事件関係資料など、全国的に注目される資料があります。それらについては順次デジタル化を図り、データベースとして公開して幅広く活用できるようにします。また、各地で開催されるイベントでは、日本遺産事業と連携してブースを出展（新発見紹介・パネル掲出・アンケート）するなど、市史編さんでの成果を活かして館林市への関心を高める活動が必要となります。

4 刊行事業

市史編さん事業では、通史編をはじめとする多岐にわたる刊行物を発行しました。これらは一部を除き現在も継続して頒布していることから、これらの在庫の管理と、適切な頒布の継続が必要です。

また、市史刊行後もそれぞれの分野で継続的に行われてきた資料調査によって得られた新たな情報や記録については、調査報告書や双書、目録等にまとめて活用に供するとともに、次世代へ引き継ぐことが必要となります。具体的には「中央通り線拡幅に伴う歴史的建造物調査報告書」「市史収集資料目録集・古文書等資料集」があり、さらに『館林双書』の続刊（例えば『里沼双書』）や「旧町村別文化財調査報告書」「館林市史総索引・総年表」等の刊行が望まれます。

5 組織と人材

市史編さん事業終了後の課題を解決し、その成果を後世に継承していくためには、継続的な組織体制の維持と専門性をもつ人材の確保が不可欠です。現状の市史編さんセンターの組織体制を維持し、上記の課題解決に努めることによって、「文化財保存活用地域計画」の目的の主要な部分を担うことが可能となります。そのために専門性をもつ職員の育成・継承を続けることによって、長年に及んだ貴重な事業成果を、館林市を「豊かな文化を誇るふる里」とするための、市民共有の財産として継承することができると考えます。

おわりに

24年にわたる館林市史編さん事業は、このほど活動の幕引きをします。しかし、幕引きは単に完結・終了を意味するものではありません。次世代の市史編さん事業へ向けた継承活動の幕開けであります。館林市民は、市史による成果によって、さまざまな媒体から新知見を得ることができています。小学生へは郷土学習で最新の歴史知識を伝えられるようになりました。これらは長年に及ぶ市史の活動成果の一端であり、他市と比べて非常に高い実績を残すことができたと言えます。その成果は、「豊かな文化を誇るふる里」をつくる活動を推進するための礎として、広く活用されることが期待されます。

市民から資料の寄贈や寄託が増えているのは、市史編さんの活動が市民に浸透している証左でもあります。収集された資料の保存と活用は市史完結・終了後の重要な課題です。その歴史資料を保存・整理する過程で、また新たな歴史の発見が期待されます。そうしたことの積み重ねの先に、新たな市史編さんの構想が立ち上がることでしょう。

将来の新市史も念頭に置きながら、市の歴史を継続的に伝えていくためには、調査研究の継承と収集した資料の活用、それを担う部署や人材の確保が欠かせません。市史編さん事業に関係した一同、そうした次世代を見据えた見識が共有され、次世代の市史編さん事業を見据えた施策の実現を期待して提言といたします。



○館林市史編さん委員会（令和7年4月～）

多田善洋（会長/館林市長）
渋谷理津子（副会長/館林市議会議長）
相澤 均（館林市副市長）
中村美江子（館林市教育委員会教育長）
吉田智之（館林市政策企画部長）
戸叶俊文（館林市教育委員会次長）
木戸浩之（館林市教育委員代表）
栗原 昇（館林市教育委員代表）
木村淳史（館林市内小中学校校長代表/館林市立第四中学校校長）
委文義之（館林市内高等学校校長代表/群馬県立館林高校校長）
渡辺敏正（前関東短期大学学長）
青山守治（元教育委員・資料協力者）
三田正信（館林市文化財保護審議会会長）
青木雅夫（群馬県文化財保護審議会専門委員/館林市史自然部会調査員）
篠木れい子（群馬県立女子大学名誉教授）
佐々木正直（前群馬県立館林美術館特別館長）
清水良男（館林市区長協議会代表/西高根町区長）
多田征訓（館林商工会議所代表/館林商工会議所副会頭）
峰岸純夫（監修者/東京都立大学名誉教授）

○館林市史編さん専門委員会

峰岸純夫（監修者・専門委員長）
澤口 宏（自然部会長）
前澤和之（原始古代部会長・文化部会長）
築瀬大輔（中世部会長）
佐藤孝之（近世部会長）
青木哲夫（近現代部会長）
板橋春夫（民俗部会長）

○館林市史編さん調査協力員会

飯塚 進（館林古文書研究会）
小貫広行（太田市立旭中学校教諭）
狩野紀憲（館林市文化財保護審議会委員）
栗原 昇（教育委員・元館林市文化財保護審議会委員）
櫻井孝至（元館林文化史談会）
須永 清（館林文化史談会会長）
山本勝美（館林古文書研究会）